

第 101 回公開シンポジウム

保育・教育の質と子どもの発達

- ◆ プレゼンター 秋 田 喜代美
東京大学大学院教育研究科教授／保育学・教育心理学
- ◆ パネリスト 赤 西 雅 之
社会福祉法人子どもの家福祉会理事長／幼児教育学
- ◆ 司 会 一 色 伸 夫
甲南女子大学総合子ども学科教授／子どもメディア学

一色：第 101 回子ども学講演会を開催いたします。今日のテーマは「保育・教育の質と子どもの発達」です。今年の 4 月から子ども子育て支援新制度が始まりました。量的拡大とともに質の向上が重要な課題となっています。では、保育や教育の質の向上とは具体的に何をどのようにしていくことなのでしょう。また質の向上は子どもの育ちにどのような影響を与えるのでしょうか。国内外のデータや実践から考えてみたいと思います。

実際にこのテーマについて基調講演をしていただきます方は、東京大学大学院教育学研究科教授で、ご専門は保育学、教育心理学の秋田喜代美先生です。今日はよろしく願いいたします。秋田先生の略歴を申し上げます。東京大学大学院教育学研究科博士課程修了、博士（教育学）。東京大学教育学部助手、立教大学文学部助教授を経て、現職になりました。日本保育学会会長、内閣府子ども子育て会議委員、文部科学省中央教育審議会教員養成部会委員、厚生労働省社会保障審議会委員ということで、日本の保育のこと全般において要のお一人です。このお忙しい先生に今日はお越しいただきました。最近のご著書としては、『続保育のみらい』『保育の温もり：続保育の心もち』『幼保小連携 育ちあうコミュニティづくりの挑戦』『よくわかる幼保連携型認定こども園教育・保育要領徹底ガイド』『学校教育と学習の心理学（心理学入門コース 3）』などたくさんのご著書がございます。

その秋田先生の後にパネリストとして、赤西雅之先生に来ていただいています。赤西先生は、甲南女子大学に 3 年前までいらっしゃいました。設定こども園・幼児学舎子どもライブラリーの設立、社会福祉法人子どもの家福祉会理事長、そして理事長をされながら甲南女子大学総合子ども学科教授をされていました。ご著書は『モンテッソーリ入門』『自由な子どもの発見』『子どもの自由世界—子どもは何を感じ、何を考えているか子ども理解のための 15 章』などがございます。

では、秋田先生、基調講演をお願いいたします。

秋田：皆さん、こんにちは。今ご紹介にあずかりました東京大学の秋田です。今日は講義という

ことですので事前にレジュメを配っていますが、レジュメに載っていないことを最初にお話しますので、そこは自分でまとめてメモを取ってください。では一度目を閉じて、口を閉じて 30 秒間静かにしてください。では、目をそっと開けてください。では、始めます。

今日は「保育・教育の質の向上と子どもの発達」ということでお話をします。保育、教育の質ということで、授業で聞いたことがあるとか、園で聞いたことがあると言う人は手を挙げてください。質という言葉です。

保育や教育の質ということが今大きな鍵になっています。子どもを中心にした時に、日本の乳幼児保育、教育で大事なものは、これから皆さんがなられる保育者と子どもの関わりが一番大きな中心になるのは、言うまでもありません。しかし、もう一方で、保育者は環境を構成します。日本の乳幼児保育・教育の大きな特徴は環境を通しての保育というところなんです。ここで頷いている人は日頃からいろいろ学んでいるということです。そこにはカリキュラムという、保育所であれば保育課程、幼稚園や認定子ども園では教育課程があります。同時に家庭との連携、そして保育者自身が気持ちのよい職場で働けるといふ職場環境、そして近年では小学校との連携が大事であることがよく言われています。

まず、今日は少しだけレジュメにないお話をします。そこだけ全部丸写しをするのではなくて、皆さんの頭をよく働かせて、大事だと思うポイントをメモしてください。ノートをとった後、お隣同士でどういうノートをまとめたのかを確認してもらいますのでよく聴いてください。

皆さんもそうですがこれからの時代、30 年後には 65%の仕事は種類が変わっているといわれています。そういう中で、子どもたちがこれから大人になっていった時に何が大事だろうか、というのが議論されています。

OECD では今、2030 年の教育を考えようとしています。その時に、まず1つは、乳幼児もそうですが、大人も何かを成し遂げる力、耐えて自分で自己調整をしたりする力、人とうまくやっていく力、協働するということだけではなくて、それぞれの人の尊厳を敬うことができるとか気遣うことができる、そして、思い通りにはいかない人生、穏やかに、かっとなってもすぐにクールダウンできるとか、自信をもってやっていけるという力が子どもにも必要ですし、皆さんにも働き始めている。また今働いている方々にもどの職場でも必要になる力だと思います。もう少し言えば、そういう能力を最近では、〈社会情動的スキル〉とか〈非認知スキル〉と呼んだりしています。

なぜこのようなことが言われるようになってきたかという、今皆さんは大学生なので、大学までは個人の成績とか学力が問題になります。でも職場だったら、それぞれが違うクラスや役割を担当し、人とうまくやっていくことが必要になります。そうしたところで一番大事になるのが、〈社会情動的スキル〉といわれる力です。では、社会情動的スキルは、いつどのようにして育つのか。それは乳幼児期が一番大事なのです。

この1つの例だけですべてのお話はできませんが、一例だけ、昨年 OECD の乳幼児会議に行ったときに出示されたスライドをご紹介します。米国の4歳児の事例です。マシュマロを知っていますか。アメリカのデータですが、4歳の子どもの園で「先生のお部屋に来て」と呼びます。そして、子どもが食べたマシュマロを目の前に出します。その時に先生が「ごめんね。先生、用事ができてしまったので、後

で戻ってくるから食べないで待っていてね」といって出て行きます。さて、この子どもはどうするのでしょうか。その子どもの待っている間の行動をマジックミラーで外から見るという話です。

どれぐらいの子どもが食べたと思いますか？7割の子どもは、我慢をしていたけれども食べました。でも3割の子どもは、我慢をして待っていたのです。この写真の問題点は何かわかりますか。ジェンダーバイアスがかかっている、男は皆食べて、女は耐えているように見えるところですが、そんなことはありません。7割の子どもが我慢できなかった。ここまではよく発達心理学で言われるデータですが、それを、例えば17歳まで調査をしているのです。このような調査を〈縦断調査研究〉と言っています。

SATというのは、共通センターの試験の問題のような進学適正検査というアメリカの入学試験の得点です。それを見ると、こちらの子どもの方がずっと高い。これだけではありません。間にいろいろなデータを取っているのです。これは、「単にマシュマロを食べるのを我慢できた」ということではなくて、「何か空想しながら待てる」とか「自分をコントロールできる」。「『待っていてね』と言ったのだから、先生が戻ってきてから一緒に食べたほうが楽しい、と思える」など、そのような見通しを持つ力がどうも大学生になる時にも影響するらしい。

そして、皆さんはBMIを知っていますか。体重と身長の対比、肥満度ですね。ボディマスインデックス (Body Mass Index) というものです。我慢ができた子どもの方が肥満度が低い。これが象徴的にしているのは、乳幼児期に見通しを持つとか、遊びや暮らしの中で自分の生活を規律正しくできていることが、単純に学力だけではなくて、その後の生涯にわたる健康とか幸せとかそういうものに影響があることが、近年言われるようになってきているわけです。

実際にOECDでは、何かを成し遂げる力、人とうまくやっていく力、そのために自分の情動をマネジメントできる力が、将来の学力、教育の水準、それから働く賃金、犯罪を起こさないなどの社会生活、幸福度とか健康などに影響があることを明らかにしてきています。

皆さん、乳幼児期が大事であることはわかっているとは思いますが、ただ、それが、今までは大学生ぐらいまでは、学力や学業と何か関係があると言われてきましたが、生涯に渡って幸せに生きていくための鍵になるということが近年言われてきています。だから、早く勉強させようということではありません。遊びや暮らしをきちんとしていくことが、このようなことに繋がるということが見えてきているわけです。

これを整理して図にしてみるとこのような、子どもの時、或いは小学校の最初の社会情動的な力というのが、大人になってからの仕事や健康、それから精神的な満足度にも関係があることが言われてきているわけです。このような生活をそれぞれ重視していくことが結局は大人になってからの幸せに影響を与えることが、さまざまところで言われるようになってきています。

もう1つだけレジュメにないものをお話いたします。

これはイギリスで行われている研究です。効果的な乳幼児期の教育と小学校の教育はどのようなものか、を調べた研究です。イギリスでは、小学校が始まるのが5歳です。日本より1年早いです。フィンランドは1年遅くて7歳。つまりいつ小学校に入学するかは、制度によって育ちが違います。

〈ナースリー・クラス〉とか〈プレイ・グループ〉とか〈デイ・ナースリー〉など、多様な形のいろいろ

な名前の制度があります。日本も保育所、認定こども園、幼稚園、それ以外にも小規模保育が多様にあります。こうした子どもがどのように育つかを、イギリスでは今も17歳まで追いかけているわけです。このような形で、子どもの家庭・家庭環境・就学前と言われる乳幼児の保育・教育、そして小学校の教育が単に学力だけではなくて、社会的な力にもどのような影響があるかということが研究されています。

このグラフで何がわかるでしょうか。これは幼児期に1,2年園に通った子どもと2,3年通った子どもでは、2,3年通った子どもの方が〈リテラシー＝読解力〉が高いということです。

これは何と較べているかということ、日本では今5歳の子どもが99%、保育所か幼稚園に通っています。でもイギリスではそうではないので、家庭と園に通っていることの比較の中で見えてきているということです。これは11歳です。これは日本のデータではありませんが、子どもの発達に特に読み書きと数学能力、何が一番効くと思いますか。ここに書いてありますが、〈マザーズ・エデュケーション＝母親の学歴〉が一番効くのです。喜んでいいのか悲しいんでいいのか。お父さんがこちらですから、お母さんの方が一番効くということです。

それだけではないのです。家庭の学びの環境として、絵本があるとかおもちゃが用意されているということと出生時の体重が影響します。一方で見ていただきたいのは、これは小学校と幼児教育の効果を較べているのです。小学校11歳になると当然、学校教育の効果はありますがそれだけではなくて、質の高い就学前の教育を受けていると、やはり小学校までその効果は残っているということがこのようなデータから分かってきています。数学もそうですし、大事なことは、自分で自分をコントロールできる力、他者への思いやり、それぞれについて、保育の質というものを外部から評価をして高い園、低い園を較べると、その園で育った子どもの社会性と呼ばれるものが違うということもわかってきています。

ここまではレジュメにはありません。今お話したことのメモをまとめてください。隣の人とどういうメモを取ったか共有してみてください。足りなかったら補足をしてください。後からまた話し合ってもらいます。今大学で〈アクティブ・ラーニング〉が言われています。能動的に聞くということはただ聞くだけではなくて、他者と確認をしたり自分の心の中で対話することです。

では、実践の中で保育の質とは何なのか。今客観的に高い低いで子どもの成長に違いがあるというデータが海外ではある、とお話をしました。では、何が一番大事なのか。私がいろいろなところで言い続けているのは、子どもが安心・夢中という時間がどれだけ保証されるかというのが、保育の質として大事であると思っています。正に子どもが夢中になっている時の子どもの声を聞き取ることが大事だと思っているわけです。子どもだけではなく、大学でもそうです。ここで寝ている分には睡眠がとれているからいいかもしれませんが、どれだけ夢中に集中できる時間があるかということがその時間を無駄にしない過ごし方だと思います。

子どもでもそうです。何か遊びで夢中になっている時に比べて、先生が例えば何か時間を待たせたりしているとその時間は無駄になることが多いです。子どもの経験から考える保育の質ということでお話をしているのは、フェール・ラバースというベルギーの研究者の考え方です。どんな子どもにも安心感、居場所感、養護の基本にあるところだと思いますが、人に支えられていると思うこと、そして文化的に

意味のあるものに夢中没頭すること、このことこそが保育のプロセスの質だろうと思います。もちろんそこには、様々な保育の方法はあります。私はそれらの方法のどれが一番いい、悪いというお話はしません。理論を知っておくことは大事です。また成果としての結果も大事です。でも正に実践に関わる方にとってはプロセスの部分が大事です。そこを実際の子どもの姿から見てもらえるといいと思っています。

このごろ私は、園での子どもが夢中になっているときの写真を撮って保護者と共有しよう、同僚と共有しようということをお話しています。たぶん、この作品だけを見た時と、この後ろにこの子どもがどうやって仲間と関わり、粘土と関わりつくっていったか夢中のためのプロセスが見えることによって、夢中になるということのプロセスが見え、価値が見えてくるのではないかと思います。

夢中の写真というのを園で撮ってもらって集める。これは桜の季節に花を拾っている子ども、前のめりに共通している姿があるわけです。これもなかなかいいです。この子どもは夢中ですが、この子どもは少し醒めながら離れて座っている。それをまた不安げに親が送ってきているのだけれども、子どもに夢中なママたちがだんだんと離れていくのです。これは、先週私が見た色水遊びです。雨になりそうな日だったので、外に出さずに先生は環境を準備しました。そして、何で色水にするのかいろいろ思うのですが、これは、クレージュ紙で、全部一度に使うのではなくて、少しずついろいろな色を場所に置いてあって、それを何枚か入れておいて、子どもが楽しんでやっている。少しずつ薄いからこそ、その紙を振ってみたりしながら子どもが試行錯誤しながら色が混ざっていく風景をよく見ています。この観ることと聴くことが、子どもの乳幼児期の生活に本当の学びに繋がる瞬間になると思います。先生は何も言わないので、最後はこのような色になっていく子どももいるわけです。これはコービーだと言って楽しんで、この濃淡を楽しむ。これは4歳です。5歳になったらまた違う素材を先生は準備すると思うのです。実際に草を使うこともあるでしょうし、それからもっと濃い色を使うこともあるでしょう。この園では子ども園なので、下から上がってきている子どもが多いので、このような形でやっていました。

こうして、子どもは夢中になりますが、ずっと夢中でいられるわけではありません。そうした時に保育者の関わりが大事です。一通りやると少し飽きてくるわけです。この先生は何をしたかという、卵パックを出されました。いろいろな色水が今まではペットボトルで1本だったものが、多様な形の色を入れる子どもがいたり、同じ色だけれども濃淡にしたり、個人によっていろいろな違いが見えてくるように思います。こういう時に環境の再構成、単に最初に「色水をします」と言って準備をするだけではなくて、そこで保育者が子どもの状況をみながら、いかにそれを更に深い学びに深い関心に導いていくか。それが専門性の1つだろうと思います。保育の質という時にも、とても高い値段の遊具を置くことが質が高いのではなくて、きめ細かく子どもの様子を捉えながらその子どもの環境を深めていく、関心を深めていくことが質に繋がります。先生は予定していなかったけれども、卵パックはいいのです。透明なので、友だちの色水に色を重ねてみたりする子どもが出てきたりします。保育者の予定を越えて、子どもが始めたことを見ていくことによって、遊びというのが言われたままのことをやっているのとは違って、自らの遊びに変わっていく瞬間だと思います。これらをごっこ遊びに持っていったりしている子どももいます。

子どもが夢中になっている時、ポイントは多様な子どもがその子どもらしさを表して考えているということです。これは秋の運動会です。この園では、先生は5歳の子どもに「一番自分が早く走れると思う

格好でスタートをこなさい。といわれるそうです。」色々な子どもがいることが分かりますね。でも、これが、小学校に上がった途端に皆同じになってしまいます。園でもこのような働きかけをして子どもが考えるということを大事にしなければ、このような工夫は出てこないわけです。保育の質という時に、ものの質だけではなくて、どのようにして先生が同じこと1つをする場合でもそこにおいて、より深い子どもの考えを生み出していけるのかということを支えることが大事かもしれません。そうしてそうした瞬間こそ子どもは夢中になるから自分で考えるし、自分で考えるから夢中になれる。そして仲間と関わり、もっと他の可能性に挑戦していく。それは統一して皆が同じようにステップを踏んでいくのではないです。少しずつ違う、それぞれのあり様という子どもの尊厳をそれぞれの先生が受け止めていながら、しかし皆で高めあっていくからこそ、このような姿の1つずつが、どこにでもありそうな風景ですが、少し留めてみてもらうと、子どもたちがいろいろなことを考えている姿が見えてくるように思います。

そうした中で充実した遊びは、子どもにとっての自信、自分作りであり、仲間作りであり、そして新たな世界を作っていくものになると思います。私が〈遊びこむ〉という言葉を作語で作りましたら、皆さんが普通に使ってくれるようになり、保育の質を見るにはどれだけ子どもが遊び込んでいるかが大事になっています。皆さんも同じだと思います。大学の学習でも、夢中になれる時と表面だけをなぞっている時があると思います。でも、このような夢中になる。そうした時に新しくその人の魅力にあったり、ものと出合ったり、そこに一体化して何かを見立てたり、大事になるのは、自分なりに変形できるということです。習ったことをそのままやるとか真似したことをそのままではなくて、その子どもらしくやってみる。

子どもは面白いです。私の院生で1人、ずっと廃材コーナーだけに1年間張り付いて、子どもが廃材で何を作るかを分析している人がいます。すると、子どもなりに同じものをとってもできると「見て」とか「見てて」と言います。自信がでてきているということです。私はこれを作ったと、違うような見立てをしていたりします。子どもはそのような中で自分らしさを発揮していくのだと思います。そうした時に、関わり方の質として先生がどのように応答したり、感じを受け止めているかが問われます。発信よりも受信の方が難しいです。でも言葉がけだけではなくて、子どもにどう応じるかこそが、心地よい関係であったり、質を高めていくのに大事です。

ではどのようにしたら、子どもにとって夢中になれる保育になるのか。これは園長研修でよく一緒に作業をするのですが、園長が考えた子どもを夢中にする保育の掟というものです。皆さんに合うものがあれば教えてください。「それは面白い」「興味にあわせた環境が大事だ」みたいな、「大人げない手加減なし」、「真剣勝負な保育環境」、「厳選された素材を使った遊びの展開」、「経過継続重なる力」、「子どものやりたい面白がろう」、「ドキドキわくわくを想像しよう」。想像できるかどうか。1人ひとりの子どもの心と対話し、当たり前なのですが、実践者が実践の自分の言葉で考える、それを園で共有することが大事だと思います。「沈黙は金」、「前のめりは集中のサイン」、「何といっても子どものいい顔」、「見逃すな子どもの発見その気づき」、「持っててね、遊びの技ヒント」、「繋げてね、子ども子どもその思い」。中々言葉のセンスがいいです。やはり保育者はこのような言葉のセンスに敏感でなければならないと思います。

「子どもの心が見えますか、そこにあなたはどんな願いを持ちますか、そのために、何を誰とどのよ

うにどのタイミングで準備しますか」。これも保育者の方に園長先生3, 4人で1グループになってもらって考えてもらったボードです。「エンジョイ・アイディア・チャレンジ」。このような形で、子どもの育ちに応答的になりながら、このような夢中にできる環境を作っていく。それはとても子どもの安心感、居場所感をつくるという意味で大事です。でももう一步伸ばしていくためには、保育の質を更に高めていくには、やはり子どもの挑戦を支えるということが私は大事だと思います。

子どもが伸びるだけではなくて、皆さんが伸びる時もそうだと思います。学んだことだけでは実習に行っても適応できなかったり、通用しないことがあります。そういう時にその場で考えるからこそ、自分の力が挑戦して伸びていく。そういう瞬間があるのではないかと思います。今から3分間ビデオクリップを見ていただきます。よく見てください。その後話し合ってくださいますので、同じビデオから何が見えるかということを考えましょう。これは3歳の子どもで、もう1人黄色い帽子の子どもが出てきます。その子どもが4歳です。ビデオを撮っているのは男性の担任保育者です。

(ビデオ上映)

秋田: 今同じものを見てもらいました。お隣の方と1分30秒で何を見たかを話し合ってください。どうぞ。

(話し合い)

秋田: 今、2人3人でお話してもらいました。私はこのようなことを先輩から聞いて、いいことだと思っています。「よい教師とかけて何と解く、その心は」。何だと思いますか。あるところではこのような答えができました。「肉まん」心の中が温かい。それからあるところでは、「高麗人参」よく効く。私が先輩から聞いたのは、これです。「盆栽」「待つ」と「聞く」が多い。わかりますか。今二人で話し合って、自分が考えたことでなくても構いませんので答えてください。

学生 A: 自分たちで遊び方を考えて工夫をして友達のを見ながら工夫して遊んでいると思いました。

秋田: 子どもなりに工夫をして自分ひとりではできない時には、台を取りに行ったりしていました。

学生 B: 最初できていないところは危ないと思いました。でも最後には友だちのを見ることでできるようになっていたのも、環境というのは大事であると思いました。

秋田: 当たり前のようですが、先生は手を出していません。でも見ながら、子どもが学んでいるのです。今度はベテランと思われる方たちにも伺っていきたいと思います。

一般：すぐに「替わって」と言わずしっかりと友だちと遊んでいる様子を、友だちも見守りながら遊んでいる姿がとても印象的でした。

秋田：ありがとうございます。

一般：自分がこんなことをしたいという上の女の子のを見ながらそれがはっきりとあって、それにはどうしたらいいのかを自分で考えてとてもよく見ていると感じました。

秋田：実は、このビデオをいろいろなところで見ていただいています。これは、担任が自分でカメラを持っていいと思ったシーンの中の1つです。この先生は、本当に必要なところ以外では、声をかけられずに子どもを見ておられます。近い年齢の子どもがいることが子どもにとっては大事なのです。養成校の先生方からの意見で出ていたのは「学生が縄を張れない。」このロープをピンと張るといふ力がなければこのアイデアがなければこのような環境は作れない。そういう意見でもあります。ここでのこの男の子なりに自分の出番を待っている、きちんと様子を伺いながら自分で挑戦をしていく、そういう子どもたちの課題と先輩のお姉さんがやっている活動への魅力、環境そしてそれを支える先生の力、そうしたものが子どもが伸びていくときに、その伸びを支えていくものになります。当たり前のことですが、易しすぎたり、毎日同じような環境の保育ではなく、子どもにとって同じようなことでも少しでも挑戦的なものが含まれていることが、実はとても保育の質を考えていく時に大事になると思います。

おそらく今日は、私は講演に来ているので、講義ではないので詳しくは説明しませんが、皆さんはヴィゴツキーの「発達の最近接領域」という言葉を発達心理学の講義等で習っているはずであります。それを思い出しながら大学の授業としては聞いてください。お互いに子どもも足場をかけながら育ちを伸ばしていくという姿です。

良質の保育というのは、教育・保育課程と見通しを持ちながら、そこに即興的に対応していく力のバランスが大事です。今日は指導案で、このような週案、日案で予定されている。でもそこに柔軟に対応していくこと。そして挑戦的な課題を設定すること、そしてその子どもの協働を支える先生の役割。〈sustained shared thinking〉といわれています。先生によって音楽が得意な先生もいれば運動が得意な先生もいれば、いろいろな人がいるはずですよ。これからの保育の質を高める時に大事なのは、園長のリーダーシップだけではなくて〈園の保育者1人ひとりのリーダーシップ〉と呼ばれますが先生たちが皆いいところを活かしてやっていくような姿になります。

子どもの日々の経験として、今挑戦的な環境や活動を準備しようということをお話しました。保育の質を考える時に、保育者や子どもが相互に支えあうと同時に大事なのは、これは日本の保育の特徴の1つと思いますが、環境を通しての保育ということです。私は、最近新しい尺度、方法を開発して共同研究をしています。PEMQと呼んでいるのですが、写真で保育の質を評価していこうという方法を開発しています。それで、先ほどいいました保育の質は安心感、居場所感と夢中ということが大事です。

では皆さんがこれから働いたりする園の中でこのような場所がどれだけあるかということを考えていくことが大事かと思います。

身体が休まる、1人や仲間内だけでほっとできる。大事に見守られているという温かさがある。やはり私の場だという感覚、我ものとする感覚です。先ほどの男の子も「椅子が要る」と言いながら、自分でビールの箱を持ってきました。きちんとある場所が分かっているという我がものとして道具を使っていました。夢中になるというところでよく言われるのは、関わりたくなるとか、誰でも使いやすい道具とか、環境の設定はあるのですが、もっとやりたいと思わせる環境をどう作るか、そして、「足跡」と呼んだり「振り返り」と言っていますが、例えば写真で「このように遊びを展開したね」と子どもにも見せてあげると、思い出して、その活動のアルバムのようになるということがあると思います。

子どもの夢中になる環境、そういうものを準備してみる。これは、よく紹介するわかりやすい例かと思います。これは京都教育大学附属幼稚園で作成されたスライドです。3歳でこの幼稚園では、このように私のロッカーを使っています。4歳はあなたと私のロッカーです。5歳になるとどうなっていると思いますか。皆で使うロッカーになっています。先生が何を育てたいのかというのを言葉で言うのではなくて、環境を通して方向付けていくということが大事だと思います。

これは「いいなと思った写真を撮ってね」と言った時に、3年目の先生が、同僚の他の先生の保育室の写真をみて撮ったものです。人形を大事に扱いたいという気持ちがこれで育っているのではないかな。いろいろな保育室で人形の仕舞い方を何気なくいろいろ撮ってみました。例えばこの園、ここで大事にしているのは、これは工夫していないわけではないのです。この隣にはきちんと車とかブロックなど何をどこに仕舞うかはやっているのですが、でもこれはもしかしたら人形の扱いとしては違うということはいえます。これは例えばいろいろな人種のお人形で多文化状況を大事にしようとしている園であることがわかります。これも面白いのですが、絵本を読んだらさりげなくそれを飾っている園と、ただピアノの上に絵本を読んでから置く先生がいるのです。その時に例えばこの先生が「今日読んだ絵本とこれだ」と子どもの手に届くところに見えるようにしておくことによって、もう一度手に取ってみる子どもがいたり、経験の連続性ということが保証されていくわけです。本当に小さなことなのですが、そうしたことのひとつひとつの積み重ねが、子どもの経験、保育の質を豊かにするには連続して繋がっていくということが大事ですので、そのような姿が見えるかと思います。

本当に小さな日々の工夫こそが、子どもの活動の質を上げていきます。これは、画用紙は四角いものだと思っている園には、このような細長い紙。子どもが4,5歳になると、うまく描けないという子どもがいるので、これは、蟻をみると蟻は白い大きな画用紙には描けません。これをこの園では全部貼ってみた。蟻の行列を園の中に貼っていくと、皆が蟻に関心を更にもっていくような活動が作られていくわけです。環境を通しての保育という時に、環境は何かものを出すことを考えているとすると、そこにあるものというものを疑ってみるとか、もっと日常と違う目で新しい目で見えてみるということが子どもの可能性を伸ばしていくわけです。

これも画用紙の真ん中をくりぬくと、違うものになる。これは、大阪で同じような写真の研修をした時に持ってきてくれた園がありました。これは、お弁当の醤油差しです。それを全部集めて金魚すくい

にした。お金はかけないけれども知恵はかける。これは「うるさいよ」と声をかけるより、このようなものを見せることによって、環境を通して動いていく。

これも面白いと思うのは、子ども自身がゆっくりと囲いたい時に先生が作るのではなくて、子ども自身がこのように出せるように折りたたみ式になっていまして、空間を自分で作っている。この2歳のクラスでやったものをこのような1歳児クラスの子どもが使うと、違う遊びができます。

このようなさまざまな、子どもだって自分でこのようにしたいのです。これも机の向き1つで、やはり子どもの集中が違ってきます。図書館でも壁側を向いているから1人でできるとか、向き合っているから協働でできるとか、そのように机の向きを考えることも出来ると思います。

これは面白かったので新聞記事にも書きましたが、お中元の季節に気泡プチプチがきたので、それを園に貼ってみた。そうするとそれまで普通の床だったのが、子どもが床に関心を持ち始めると先生は「そうか」と思って、壁にも貼ってみる。気泡の大きさによって、子どもの関わりが違う。大きな気泡と小さな気泡がありますが、それをどのようにどの位置に貼ったらいいのか。要するに保育者が環境を探求しないとそれによって更に子どもをよく見るということが起こるわけです。「何の活動だから何何です」と置くだけではなくて、それによって、子どもがどのようになっているのかがよく見えるということが子ども理解ということと環境の構成ということが繋がるということが、保育の質を上げていくのには大事です。段々とこのように皆が来るので、このようになって、この園では色々な形でやっていました。

時間の関係でこの辺りで終わりとしますが、今日、子どもの育ちを量的に見るならば長期的に見ると、保育の質が育ちに影響するというお話をしました。そして、子どもの夢中を保障する。居場所感と夢中。そして、そのためには、挑戦的な夢中になるには、保育者側の応答性と挑戦的な環境ということがとても大事である。環境は単に構成するだけではなくて、常に探求しながら作り続けていくものだということを具体例を通してお話させていただきました。

「子ども時代に心の池が満たされると生涯枯れることのない泉になるでしょう」と私の本の写真ですが、写真家の篠木眞さんという人が出している本に述べられています。今皆さんは「あかんべー」とかしません。幼児期だからできる、このような思い出はあるのではないかと思います。「遊びの中に見えないものを見出す感性。聞こえないものを聞き出す感性。」こうして子どもが安心夢中な姿を保護者に伝え、園全体で地域社会と繋がっていくということが大事であると思います。子どもが大きく見える瞬間、小さい子どもでありながら、大きく見える瞬間、そして伸びようと伸びている部分だけではなくて、これから伸びようとこれからする部分を捉えていく、そうした時に、子どもと共に子どもの育ちを分かちあって、皆で育ち合うことができるのではないかと思います。当たり前のことですが、質の向上というのは、単に尺度で量的に見えるものではありません。私たち自身の良質な暮らしへの感性から生まれるものだと思います。それが実は、子ども子育て支援システムでも質が言われていますが、そこの願っている具体的な姿なのではないかと思っています。

では、これで私の話を終わりにしたいと思います。

一色：秋田先生、どうもありがとうございました。非常に具体的に保育の質についてわかりやす

くお話していただきました。ありがとうございました。では、赤西先生にパネリストとして今のお話に対するコメントをいただきたいと思います。

赤西：秋田先生、ありがとうございました。短い時間でしたが、お話を聞かせていただいて、一言で申し上げますと一番難しいことを最も簡単に説明する。すごいことだと思って聞かせていただきました。私も保護者と向き合った時、子どものことを伝える時に、相手に分かるように説明するというのは難しいです。特に中身が複雑なことになればなるほど、伝えるのは難しくなります。でも、それがとても平易な言葉で言葉を生み出して伝えることができて初めてプロの先生だと思っていましたので、今日はお話を伺ってまずそのことが思い浮かびました。

私からは何も申し上げることがなくて、レジュメをいただいでいて、お話を伺って、先生は何度も安心、夢中ということをおっしゃっていました。それと最初にイギリスやアメリカのデータの紹介もしていただいて、先生のお仕事柄だとは思いますが、我々現場の保育者のこれからの保育のグランドデザインを示していただいた一端をうかがうことができたと思っています。

これは私の立場からのお話になりますが、先生、指導者の立場ではなくて子ども側からそれを聞いたらどう聞こえているのかと考えました。本当に配慮が行き届いて、保育の質の中身のことであったり、きちんと話をしてくださってよく分かる。しかもバランスがとてもいいです。子どもたちの中には、それを聞いて、私たちはあのように育てられるのだ、皆に見守られてあのように環境を整えてもらえてあのように育てていくのだと自分の育ちを楽しみにできる子どもたちがたくさんいるのではないかと思います。ただ、一方で無理じゃないか、俺はあれができないし、あそこまで言われてもちょっととその重さにプレッシャーを感じている子どももいるかもしれないと思ったりします。

私たちはどの子どもも切り捨ててわけにはいかない。きれいごとではなくて、現場にいるとそう感じます。特に最近は少し発達障がいのあるボーダーラインの子どもたちがとても増えてきましたので、先生たちは、益々仕事の中身はコンプレックスになります。どの子どもも切り捨ててわけにはいけないとなると、プレッシャーを感じている子どもをどうしようか。楽しみにしている子どもは望むところで、そういったことを考えた時に、このグランドデザインの中で、私が一番注目したいのは、今日はそのお話が聞くことができなかったのですが、やはりよく言えば子どもを中心にしたということなのですが、子どもが選ぶという視点がまだまだ足りないかと思います。保育園、幼稚園、小学校は基本的に子どもが選ぶという環境づくり、カリキュラム作りは弱いと思うのです。

自由遊びの時間がありますが、授業と授業の間で、小学校などではよくわかりますが、算数と国語の間の10分のインターバルみたいな発想ですが、子どもが選ぶ環境というのは一体どんなことになるのだろうか。でも、それを求めないことには、俺はわからない、かなわないというプレッシャーを感じている子どもたちには荷が重過ぎるかもしれない。

この前、夏祭りをやりましたが、5歳児の40人ぐらいの子どもに夏祭りの制作の話をしました。「では来週から始めますからね。テーブルは4人用です。空いたところからしましょうね。材料はこの棚にあります。見本はこれです。月曜から金曜の間に全部やってくださいね、任せるからね」で話が終わっ

た。月曜になると、そういうことが得意な子どもはすぐに来て、どんどんやっていきます。楽しくて仕方がない。苦手な子どもはやはりいるのです。外でサッカーをしています。外で、砂遊びで穴を掘っています。全然構いません。先生は知らない顔をしています。火曜日、「大丈夫か」と声をかけます。「まだいい」としか答えません。水曜日、ますます盛り上がってサッカーをしています。中心選手です。「もう、半分終わったらしいぞ」と言う、「まだいい」。木曜日、動かない。サッカーをしている。金曜日。もう週末でトーナメントが始まって、中心選手ですから盛ります。わたしはいつもレフリーです。すると、突然そばに来て、「ちょっと行ってくる」というのです。試合中だから待てといったのですが、「行ってくる」と言うのです。でも5歳の仲間たちは、彼がどこに行ったのかは知っているのです。2階に行く」と担当の先生は涼しい顔をして「いらっしゃい」と言いました。それだけです。でもやる気になってきていますので、次に目標があるので、それをしっかりやります。「遅い仕事は誰でもできる。雑な仕事はやり直し、分かっているわね」と先生はそれしか言わない。結局、その週に全員の作品は揃いました。一般的に言って子どもがしなければならないこと、自分の課題、目標、目的、子どもの課題はいつも外から来る。環境を整えて先生がタイミングよく提供する。これは私たちの仕事なのですが、子どもは自分で選ばなかったら責任もとってくれません。あてがわれたものは粗末に扱います。

私たちは、子どもが選ぶという環境をどのように整えていったらいいのか。昨日は朝、子どもがやってきて、「山本先生、一緒にごはんを食べよう」と言って、「いいよ」と言っただけでも、山本先生は忙しくて間に合わなくて、レストランに行くと先に食べていた「ごめんね。遅くなって」という、「いいよ、ご飯食べたら砂場に集合、それで明日のどろんこフラッグの練習をするから」と言っていました。横で聞いていると高校生の会話のようでした。5歳です。でもきちんと集合して皆で穴を掘ってどろんこフラッグの練習をしています。

朝やってきた時に、今日、自分が何と何をするか、自分でオーガナイズして欲しいです。そういう環境を整えたいです。子どもの発達は発達曲線でいろいろあります。それと認知特性があります。この認知特性が見えなくて曲者で、子どもながらにいろいろなばらつきがあって、理解の仕方も記憶の仕方も違います。やはり子どもに任せたい。でもこうなると私たちの出番とか責任がもっと大きくなる。こういったことを是非、秋田先生これからの研究課題にさせていただいて、次のグラウンドデザインを示していただきたいと思います。

そういえば、フレーベルはキンダーガルテンといいましたが、ガルテンとはうまいこと言ったと思います。これがクラスルームでないところがすごいと思います。今日は、フレーベルの第一人者の白川先生が来ておられますので、後でそのことを教えていただきたいと思います。そのようなことを考えながら、とても面白くお話を伺いました。学生もとてもいきいきしていて、秋田先生の懐の深さを教えていただきました。ありがとうございました。

一色：赤西先生、どうもありがとうございました。今、赤西先生がおっしゃった子どもが選ぶということ、これについて、秋田先生のお考えをお聞かせいただければと思います。

秋田：赤西先生、ありがとうございます。子どもは園を選べない。けれども、園の中で活動を選ぶことができたり、私が知っている保育園では、例えば、時にはビッフェスタイルで自分が食べられる量を自分で選ぶ日もあるという形でしていたり、その子どもの選択ということがとても大事だと思います。そこが実は保育者の専門性と関わっているといつも思っています。

小学校以上の学校にも行かせていただくので、小学校の先生が園に研修に来られて時に言われるのは、教室という場に決まったところに入っているから、そこだけを見ればいいけれども、本当に思い思いのところに子どもがいる。自分がどこにいていいのかとても悩むとおっしゃっていました。私は「思い思い」という言葉が大事だと思っていて、たまたま昨日、うちの大学で保育の研究会をしていて、早稲田大学の佐藤先生という建築学の先生がおっしゃるのは、大人は賑わいの環境が好きで、皆が盛り上がっているとか集まっているとかが好きである。でも本当に子どもが子どもらしい時というのは、思い思いに遊んでいて、思い思いの場所で思い思いの活動をしている時に、その子どもらしく遊べるということでした。それがもしかすると、今おっしゃった子ども自身がここで遊びたいと選び、そして仲間を選んでいくということに繋がっているのだらうなと思いながら聞かせていただきました。

私がいいなと思うのは、時々、保育室も自分のクラスでない異年齢のクラスに入り込んで遊んでいる子どもがいたりします。でもそれをまた違う年齢の子どもがサポートしながら、一緒に遊んでいたります。そのような場面を見ると、居場所が園全体、子どもにとっての居場所になっていることがとても大事なのだと思います。思い思いに遊べるものの一つに、私は水とか土とか砂というようなものが大事だと思っております。素材がとても柔らかいので、子どもが思い思いにその場所に行って関われるもので、そういう素材の経験を豊かにできることを保障したいと思っています。でも実際はそれに逆行しています。段々と園庭の環境は劣悪になり、親御さんも水とか土や砂で汚れることを嫌がります。ある園の園長が言っておられましたが、園長、施設長が変わって急に水道代が上がると問題なので、やはり少し水の使用も考えてつかうということでした。

でも、子どもが豊かに遊ぶためには、一見どこにでもありそうな水や土や砂というものに、その年齢相応に関わっていけることが大事かと思っています。今、関わっていけると言いましたが、関われない子どももいます。むしろ、そういう子どもが無理に関わるのではなくて、先ほど先生がおっしゃったように、待つて待つて、その子どもの機が熟した時に遊び始めるというのは大事なかなと思います。

ある園で伺った話で、「おおきなかぶ」の絵本を読んでいた。「うんとこしょ、どっこいしょ」と皆で順番に遊びにしていた、でもそこに一人入らない子どもがいた。先生は気になっていたけれども、何も言わなかった。ふっと子どもが自由に遊んでいる時間を見ると、子どもが雑草のそばで草を抜きながら「うんとこしょ、どっこいしょ」と言っているのです。大勢で絵本を読んでいるときは、何となく入りたくなかったのだと思うのですが、響いているものがあって、その子どもなりの表現が熟す時までゆっくり暖めていたのかと思います。そういう空間が選ぶということなのかと、先生のお話をうかがいながら思いました。

一色：赤西先生、いかがですか。

赤西：選ぶ次にくるのが責任だと思うのです。今は圧倒的にどこに行っても寄り添う保育としています。これが悪いとは言いません。子どもは弱い存在ですから、温かく寄り添うというというのは当然なのですが、子どもにも責任をとっていただきましょうという発想が少し弱い、十分に責任はとれる、ただ、子どもに責任を求める時は、子どもの自由度をもっと増やしてあげないといけないということに繋がってくるかと思います。これは、子どもをどう育てるかの基本的な考え方によると思うのです。

先ほど、秋田先生が動画を見せてくださいました。黄色い帽子の女の子と赤い帽子の男の子、年齢が違うのかなと思って見ていましたが、殆ど黄色い帽子の女子は口出しをしなかった。時々、登っていました。それは赤い帽子の男の子がちらちらと見ています。これは異年齢交流ということになります。黄色い帽子の女の子は立派な先生だと思いました。余計なことを一切言わず、きちんとどこか気にしていて、危険のないようにということかどうかはわかりませんが、どこか応援していて気にしているということです。あのような異年齢交流の環境というのも、やはり子どもたちの自由度の高い、選べる環境の中で垣根を越えた関わりを保障されるのだらうと思いました。

そして、水と土と砂のことをお話されていましたが、本当におっしゃる通りで、トライアルウィークの中学生が保育園に来て、砂遊びをしている子どもをしゃがんで暗い顔をして見ていたのを憶えています。聞きますとその14歳の子どもはこんなことをやったことがないと言いました。「やってみればどう」と言いましたが、手がでない。また、皆さんの先輩が実習に来た時のことです。雨上がりで皆が裸足で走りまわっています。実習生に「裸足になってみたら」と言ったら「えっ」と言われました。裸足で土の上を歩くというのが20歳21歳までにほとんどやったことがないみたいです。でも、言われてやってみるととても楽しかったようです。ですから、皆さんは保育者或いは小学校の先生を目指されるわけですが、経験の幅を広げたほうが良いと思います。その中から環境の作り方や子どもの自由な活動については、どんどん思いついて、どんどん発想が広がっていくと思います。ですから、是非、学校時代にいろいろな経験を積んでほしいと思います。

一色：では、学生の皆さんでコメントや質問などありますでしょうか。

学生：秋田先生、赤西先生、今日は貴重なお話をありがとうございました。赤西先生がおっしゃった子どもが選ぶという視点のお話と水、土や砂や木のお話を聞いた時に、秋田先生が見せてくださった綱を渡る子どもたちの映像が思い浮かんだのですが、その時に、綱が張ってあるだけで決まった遊びがないと思って、その水や土なども、このように遊ばなければいけないという決まりがない遊びなので、そこで子どもが選べる環境というのが構成されているのかと思いました。男の先生があまり声を掛けずに、でも子どもが何をしたいかどうやったら子どもが夢中になれるのかと考えいらっしゃるのが、綱を張った方がいいのかと綱を張り直されていましたが、それも、子どもが夢中になるということのをうまく言葉で表せないことで保育者がつくる環境も言葉ではうまく言い表せないと思うのですが、その保育者の言葉で言い表せない行為と子どもの言葉では言い

表せない見えないもののやりとりで、子どもの学びや環境が作られているのかと思いました。質問ではありませんが、このことについてもう少しお話いただけますでしょうか。

秋田：すばらしい保育の本質のようなことを語ってくださいました。保育者は、言葉で言い表せないことと見えないもののやりとりで構成されている、だから、言葉だけで伝えられないから少しでも近くと思って写真を見ていただいたり、映像も特定のアングルですが、それを見ていただくことで、何か感じ取っていただく、でも感じて動くのですが、それこそが保育の中でナイーブなようだけれども専門的な判断だろうと思います。それは保育者だけではなくて、先ほど赤西先生が責任という話をされて、4歳の子どもが口出ししない。

私もいろいろな場面を見て、今も印象に残っている場面があって、少し高いところに女の子が登ろうとしているのですが、自分の力で支えて登るのがたいへん。男の子は先に登っていたのですが、どうするのか、もう少しというところに来たところで、ぱっと手が出て、引き吊り上げたのです。同年齢でしたけれども、その女の子は1回、そこに登れたのです。すると、その後は手を出さない。折角登れたのだから登っていればいいのに、その女の子は、もう一度降りて登ってみるのです。どうするのかと思って見ていたら、もう手は貸さない。でももうできるという自信で、余計なお節介ではないのです。子ども同士とか保育者でもわかっている人は通じていて、今が必要という時は手を出すのだけれども、それ以上のことは言わないし、そこにでもお互いによかったという通じ合いがある。そういう部分が大事なのかと思いました。短い話でそこからポイントを掴んでいただきました。

赤西：ロープを張っているだけで、どんな遊びが始まるのか、ただ、あのロープを張った先生、それなりに意図は持っていたと思うのです。なので、あなたにお願いしたいのは、そこに桜の木とかありますから、ロープを張って一度自分が登ってみて、落ちてみて、こういうことかということを経験して、今度子どもたちにこれは落ちたら痛いし、面白いし、ドキドキするし、これはわくわくするしというのを一度やってみて、実践してみたいと思います。

秋田：皆さんに一言、自分の経験をお話します。なぜ私は、乳幼児期の保育の質にこだわるか。私はとても変わった育ち方をしています。所謂、教育にとっても熱心な母親でしたが、よかれと思って、我が家のすぐそばに、たまたまある小学校受験塾があって、その塾は東京のいろいろなところから学びに来ているのです。その塾が、我が家が越したすぐそばだったのです。それで親はこんなに近いのであればと親心で、その受験塾に連れていきました。私は幼児期になぜか悲しいことに、幼児期の記憶は皆さんも持っていると思いますが、私の中に残っている幼児期の記憶の1つが、タイムウォッチで用意スタートという、小学校受験用のワークシートを書く記憶が残っています。

それから片足で何秒間立てるかという運動テスト、小学校受験の記憶が残っています。これは、子どもの記憶は大人になっても消せないのです。

一方で、園の記憶もあります。でも、幼児期に本当に子どもにいい思い出を作るのが大人の責任だと思っています。だからこそ、豊かで楽しい遊びの出来事の記憶を是非、先生になる人たちが作ってほしいと思っています。決して私は母親を恨んでいないのですが、でも、幼児期の記憶というのは消せないのです。記憶は消さないからこそ、作る側は豊かな時間を保証してあげて欲しい。乳幼児期にしかできないことを保障してあげて欲しいと思います。

一色：最後にご経験についてのお話していただきました。時間となりましたので、ここで第一部を終了いたします。

〈第二部〉

一色：第二部を始めます。今回は時間の関係で30分から40分の構成で第二部とさせていただきます。

一般A：私の家の近くは住宅地で、近くには小さな幼稚園しかありません。その幼稚園はスクールバスがないので、担当の先生が朝、子どもたちを集めて送り迎えするのです。私が朝、花に水遣りをする時間帯になると、幼稚園の先生が子どもたちを引率して、幼稚園に連れていくのですが、だいたい2年ぐらいで先生がお変わりになる。要するに寿退職というのでしょうか、3年と続けて同じ先生が見られないのです。若い先生が中心になって、幼稚園を運営しているのではないかと思います。今の私立の幼稚園、認定子ども園になっているのですが、そういう幼稚園は、先生の入れ替わりが激しいと思うのですが、経験を積まれると給料が高くなって幼稚園の経営が苦しくなるので、そういうことをしているのかと思うのですが、秋田先生のように高いところから広い目で見られたときに、私立の幼稚園の現状はどうなのか、とくに若い先生の使い捨てが今の幼稚園や保育園を成り立たせているのではないかと思います。その辺りはいかがでしょうか。

秋田：私立幼稚園の正確なことは覚えていませんが、多分、平均勤続年数が8年ぐらいで、公立幼稚園で17年から18年という数字です。ここにも私立幼稚園の先生も来られているので後で実態を聞きたいと思いますが、かなりいろいろな園があると理解しています。ただ、私が30年近く関わっている私立の幼稚園では、寿退園もあります。それは園長が辞めさせようと思っているというよりも、結婚して、通勤をするには遠いのでとても朝早いのが続かないなど、さまざまな物理的な事情があります。このごろは結婚というよりは、出産を控えて担任を持って、幼稚園の場合は一人担任が多いので、そうすると担任を持っていると、それは難しいということで辞められる方もおられます。

だから良質の幼稚園は、またもう一度働きたいとか一度辞めてもまた戻ってこられたり、保護者だっ

た人がこの園だったらいろいろ協力したいということで幼稚園教諭の免許状を持っている人が帰ってこられたり、卒園生が幼児教育をするならここだという園もあります。一方で、保育の質を上げるには、離職率を下げるというのは定番で、働きやすくやりがいのある園にしていくことが大事であると思っています。

私自身はあるところで頼まれて私立幼稚園連合会に言われたのが、若い先生が辞めていく。その時に本当に保育の面白さを知ってからやめるのではなくて、その入り口に立つ前に辞めてしまうことが結構あるのではないかと。やはり、保育の手応えを若手の人が、保育が面白いと思える研修はできないかを考えて欲しいと言われました。

それで、写真を入れて、若手でもベテランでも同じ土俵に立って、まずは他の人の保育室を見て、このようなことを学んで、私もこのようにしたら変わったという手ごたえをまずは得てもらうということが、環境の写真を始めたきっかけです。1人ひとりの子どもの本当にいろいろな子どもにに応じていくことが大事であると思います。けれども、それをすぐに1年目の新任の先生がうまくできるわけがなく、それはできないということを指導されるだけではなくて、私もどこか工夫をしたら、やはり子どもにいいことができたとか一緒に喜べたという経験を増やすのが、少しでも勤続年数を増やすことに繋がらないかとやっているところです。

一色：では、他にいらっしゃいますでしょうか。

一般 B：今日はお話をありがとうございました。私は公立の子ども園に勤めている者です。今お話を伺っていて子どもが選べる環境を、もっと子どもにもっと自由度が高い保育をとということを知って、これが全国のたくさんの保育園、幼稚園があって、制度も小学校との連携を深めるとか地域との連携を高めるとか、保護者への教育をするなど、いろいろなことを国の方針で変えられています。どうしたら、本当の保育の質が変わっていくのか。どうしたら、子どもがもっと自由度が高いとか今赤西先生がおっしゃっていたようなことが、他の保育園でも実践されていくのかと察してもらいたいと思うのです。なぜかというと、私が勤めている園は公立の保育園から私立の保育園に変わって、子どもたちが一斉保育でこれも先生が全部を取り仕切る保育をしているところから、先生が変わって子どもだけが残っている状態で、保育の内容がぐんと変わって、赤西先生がおっしゃっていた、自由度の高い本当の子どもが選べるいろいろな環境も変わっていくと、子どもが同じ子どもだったのに、びっくりするぐらい成長が違っているのです。いいことがどうやって他のところに広まるのかと考えているのですが、先生方はどのようにお考えでしょうか。

秋田：いつも申し上げているのは、広げようと思って広がるものではない。でもいいものには惹かれるので広まっていく。誰かが広げようと思って、何とか方式をやれば、それはその時は広がるかもしれないけれども、やはり子どもの実態にそぐわなければ消えていくのに対して、その子どもを中心にその園でしかできないことかもしれないけれども、その姿を見せてもらって焼

きついた雰囲気であったり、関わりであったり、そのようなものは、自然に広まっていくのだという感覚を持っています。

ただそれは、時間もかかりますし、トップダウンにこれからやってくださいといっただけのものではない。ただ神戸市の保育所でされている「みてみて保育」というのが気に入っていて、そういう小さなところから、お互いに見合いながら共有していくことが大事ではないかと思っています。自由度の高い保育というのも、子どもが選べて質の高い保育もある一方で、放任だけの園もないわけではないのです。そこも、何が違うかをきちんと見る目や周りの人を育てていかないとならないと思っています。その辺りも非常に難しい問題だと思っています。

赤西：広まるか広まらないかは別にして、乳幼児期の人たちが生涯に渡ってとても大事だというのは秋田先生のお話でありました。本当にそうだと思います。ただ、今私たちの置かれている現状は、学校との接続性を言われながら、学校に行くと全く選べない子どもたちは、お仕着せの生活に一度に入って、25分で給食を食べなければならないという世界に入るわけです。

でも、私たちの育てた子どもたちが、どのような育ちをしていくのかということに関して、もっと自信を持てばいいと思うのです。子どものことは子どもに聞けといつも言いますが、卒園して小学校に行くと、「学校に行ったら好きにできないし、自分で選べないし、困るしたいへんだね」と言った時に、小学校1年生の子どもがこう言いました。「学校は簡単だ。学校は先生の言うことをきいていけばいいんだ。だから簡単なんだ」。これはとても深いことを言ったと思います。この領域まで育ててしまったら、おそらく、学校時代をどうやって自分が適応して乗り切っていくのかというのは、ぶれないでこの子どもはいけるのではないかという安心感も感じました。

学校時代は絶対に終わります。終わってからが大事です。この大学にいた頃にも学生が始末書に印鑑を押してくださいと来ました。何をしたのかと聞くと、スマートフォンのチャージをして盗電したということです。でも大学の中ですと、始末書で済みます。でも街に出ると、これは窃盗になってしまうかもしれない。だから、学校の中では守られていると思います。だから、子どもたちを育て、世の中の変わりが遅くて、そこまで生きていられないと思ったりしますが、育てた子どもに対してきちんと自信を持とう。責任を持とう。彼らがいつどのようにして活躍するのかということに関して希望を持っていたい。そして今日を、明日をそれでも少し進められていくようにと毎日仕事をします。

今日、秋田先生に、最初にアメリカとイギリスのデータを見せていただいて、とても意を強くしまして、やっぱりそうなのだと心強く感じました。

一色：ありがとうございました。では、他の方でいらっしゃいますか。

一般 C：秋田先生、赤西先生、本日はありがとうございました。私は川西市の教育委員会から参りました。私どもの市では、公立の幼稚園、公立の保育園の一体化の施設の計画がありまして、幼保連携型の認定保育園なのですが、公立の一体化の施設としまして、いろいろな就学前施設が

ありますが、公立の認定子ども園としての役割を教えていただきたいのと、これから整備をしていくのですが、その中で一番考えていかなければいけないことを教えていただきたいと思います。

秋田：幼保連携型認定こども園の性質上、従来の保育所の文化と幼稚園の文化がそこで1つの新たな文化を作っていくことになると思うのです。施設を作るのは、ある意味で物理的には簡単なのですが、その文化を一緒になって作り上げていくには、恐らく本当に対話というか、しっかり違う文化があるので、そこを話しながら進めることが非常に大事だと思います。カリキュラム1つでもそうですし、もう1つ、幼保連携型認定子ども園に大きく期待しているのは、地域の子育て支援の中核になるという役割です。ですので、その辺りを今後誰がどのように担っていくのかを考えていただきたいと思います。

私は幼保連携型認定こども園にいるからこそ、保育所に通えなくても同じ園の中で、1号認定の方に行くことができたり、そういう移動も可能になるので、そういう面ではプラスの面も大きいと思っています。遊びを中心にした保育というところは譲らず、幼保連携型認定こども園もそうですが、時々誤解があるのですが、決して早めの教育というものを指導と考えるのではなくて、遊びを中心とした保育の文化を幼保で一緒になって作っていただくと同時に、生活のリズムを考えていただきたいです。

私は幼稚園の預かり保育に不満を持っていて、もっときちんと教育課程外ではなくて、子どもの生活のリズムに合った1日の暮らしを考えていただきたいと思っていたので、そういう意味では、1つの方向としては、いい方向に進んでいるのではないかとと思っています。丸ごとの子どもの生活の保育課程、全体の計画ということを第一に考えていただきたいと思っています。

赤西：公立であるが故のポイントを2つ申し上げます。1つは、子どもの方を向いている。スタンダードな保育をきちんと積み重ねて、親へのサービスというのは変な言い方ですが、子どもの幸せを目指す。これは、公立が一番得意とするところですので、まず、子どもの方を向いて保育をしていただきたいです。

それともう1つは、親を育てて欲しい。日本中いろいろなところに呼んでいただいて、いつも聞くのは、「最近の若い親は」という言葉です。これにはいろいろな言い方がありますが、1996年のエンゼルプランのスタートからして、そういった保育園、幼稚園が何でも言えば通る、待機児童対策を含めて、国は6千億円のお金を使って、施設を作り続けてきたわけです。だから、保育園、幼稚園は言えば通るのだ、今になって若い親がわがままだというのは、私にも、秋田先生の世代にも責任がある。我々世代の責任だと思います。家庭教育がまず基本になります。家庭生活以上のことは外では起きませんということから始めて、親を育てるということ、もう一度公立で踏ん張ってやっていただきたい。この2点を是非取り組んでいただきたいと思います。

一色：では、他の方でいらっしゃいますか。

一般 D：今日はありがとうございました。私は幼保連携型認定子ども園を今年から始めています
本山北町あすの子ども園の園長です。今日はお話をお聞かせいただいて、最初に社会情緒的スキル
ということの育成について話が出ていて、パワーポイントで段々と大きくなっていくにつれて、
スキルが段々と大きくなっていく映像があったのですが、私の園で、保護者の方とお話している
時に、うんと小さい1歳とか2歳とかの保護者の方が、友だちとうまくやっていけない。「友だち
が「遊ぼう」といったら「嫌だ」と言って、この子は嫌われてしまう、このようなことで人間関
係がうまくいかない」とか「友だちに誘われた時にこの子は断る、そんな断ったらいけない」と
言われていて、発達段階からすれば子どもは大人の友だち関係とは違うから、そのように考える
ことではないと話をしたのです。今日の先生のスキルのところで出て、それを思いました。子ど
もが大きくなるに連れて、社会的にも自分の興味とか意欲とかいろいろなことに取り組むことに
当たっても、それはスキルではなくて意欲とか興味とか友だちが好きとか友だちと遊ぶのが好き
とかそういうことで、育って欲しいというのが私の願いなのです。

後でお話を伺っていたら、夢中になることが大事であるということでしたので、その辺りは解決した
のですが、今の保護者というのは、やはりスキル重視で、その辺りはとても説得力はあって、意欲
とか興味とか人が好きとか発達段階を大事にということを話するのが、説得力がないものですから、
どのように話せばいいのかアドバイスをいただけたらと思います。

秋田：ありがとうございます。やはり親御さんの中に折角集団の保育の園に行っているのだから、
友だちと仲良くという発想があったり、それからできるだけ多くのお友だちと、例えば、1学期
のこれぐらいの時期だったら、全体で遊ぶのではなくて、自分の仲良しとじっくり遊べる方がよ
くて、それを広げようとするほど薄くなります。そういう時期や年齢などをわかっていただくの
には、私は写真や映像を使いながら、この時期に夢中になって、こういうことをそれぞれの年齢
でやっていくからこそ5歳の後半になった育ちがあるのですよということを伝えていくことが大
事だと思っています。

断れるというのは最高じゃないですか。大人が情に流されて引き受けてしまってどれだけ後悔するか
を考えたら、きちんと自分で自己表現をできる子どもはすごいなと思います。あなたのお子さんはこん
なことができて、夢中になっていていいですねということを伝えてくださるといいかと思っています。た
だ難しいのは事実で、言うのと実際の保護者の対応が難しいのはわかっているのですが、私がいいな
と思っている園では、保護者会有的时候に、細かなことというよりも、映像とスライドを作ってそれで紹介
をしながら、この時期にはこのようなことがあってというお話をされています。もちろん、プラスの面だ
けではありません。引っかいたり、噛んだりというトラブルがあります。でもそれがどういう意味なのか
ということをむしろ共有していただくことが大事かと思っています。的確なお答えになっていなくてすみ
ません。

赤西先生、いかがですか。

赤西：私の園の園長ですから、それは自分で考えてください。

一色：他にいらっしゃいますか。

一般E：また「みてみて保育」をしているみかり会の者です。両先生、ありがとうございました。先ほど赤西先生のお話を伺いながらそうですねと思ったので、それをきっかけに質問をさせていただきます。

結論は異年齢の先生のご見解です。就学前の多くの多様化にするべきだと、先生の自分作り、仲間作りが必要です。赤西先生の言葉でいうと、選ぶという自由さの中には、相手を選んだり、仲間を選ぶ自由さがあっていいと思うのです。幼保連携型認定子ども園教育保育要領の中にも、少し異年齢が総論のところに入りましたが、私は少し不満を感じているのですが、兄弟が少なくなったという理由ではなくて、もっと就学前に多様に関わりが必要であると積極的に進めるべきだと思っています。振り返れば、私は、豊田英雄オリジナルの頃に日本の幼児教育世界ではないかと思っているのですが、所謂、東京女子師範付属幼稚園9年に始まって、その10年7月、半年もならないうちに何をしていたかわからなかったという豊田英雄さんが幼稚園教育規則を作って、いきなり年齢別保育が始まっているのです。これは明らかに小学校をモデル化した。そこに深い考えがあったとは考えられない。そしてまた元の小学校とはというのは、これは世界的な傾向ですが、学年性別、年齢別にしているのは、徴兵制度がしやすいからだという説もある中で、今まだ何かしら豊田英雄さんの怨念を感じるぐらい、年齢別に意識が行き過ぎているのではないかと感じています。秋田先生の異年齢についてのお考えをお聞かせください。

秋田：白川先生がいらっしゃっていますので、白川先生いかがでしょうか。

白川：フレーベルの幼稚園は年齢別ではありませんでした。

秋田先生のお話で夢中になることということでしたが、幼稚園制度がありましたが、遊びの指導という言葉が出てきたのですが、夢中になるというのは、昔は路地裏とか田んぼのあぜ道で異年齢の子どもたちがいきいきと遊んでいて、コマの回し方などを教えて、要するに遊びは指導ではなくて、仕掛けるものだと思います。どんどん仕掛けていってそうすると、仕掛けられた子どもも夢中になっていく。昔はそうでした。でも今はそれがなくなって、幼稚園という小さな環境で遊びの指導をどうしたらいいのか。何遊びをどう指導するかとなってしまっていることが問題だと思います。

秋田：ありがとうございます。まず異年齢ですが、多分、国や制度にもよるかと思いますが、例えば、私が見せてもらっているドイツの園でも、年齢が学級という形で同年齢ではないところも多いです。私は元々、園全体で子どもを育てるという発想から見て、異年齢ということは大事だろうと思っています。

ただ一方で、子どもの育ちを考えた時に、ある経験をして欲しい部分については、むしろ同年齢で、

でも同年齢でも早生まれと生まれ月によって解析してみると、明らかに大きく違いがあるので、だからといって、同じことをすればいいのではなくて、そこに配慮が必要だろうとお伝えしているのです。ある経験に関しては、同年齢だからこそ、できることもあると思います。それは園の規模が関わってくると思います。ただ、学級ということを1つ考えることは教職員などの定数を確保するという財源を取るためには大事です。私は、保育士にしても乳児の何歳だからそれは一緒にいいというのではなくて、0歳と1歳という形で、きちんと年齢を分けて、そこに手厚くするのはとても大事なことでと思います。ただ、保育は自由にやって、異年齢型、何とか型ですというのではなくて、自然な形でもっと異質な年齢が関わり合うことが大事だろうと思っています。

そして、遊びに関して指導という矛盾がありまして、要するに遊びという本質的な遊びは、基本は自発的にその子どもが、自ら行っていった時の心理的な状態が遊びになっているかどうかがとても重要なことだと思っているのです。それが時には、所謂、設定的な指導という形にもなっているところに矛盾もある。でも、それが糸口になって、子どもがそこから自由な遊びを展開できるのであれば、異質な年齢で今遊びを学べないような子どもたちにとっては、それもまた、時には大事な場所にもなり得るのではないかとは思っています。

例えば、子どもが縄の経験をしたことがない。では、皆でそれをやってみようとか、カルタ遊びを家でもやらないという時に、ただものがあつたからと子どもが遊ぶわけではないので、そういう時に、遊びの入り口に、そのさまざまなものを先生が準備してあげることが大事です。ただそれが本当に遊びになるかどうか。遊びにならずに指導して、それだけで終わりにするのは、やはり身につかないと思っています。真の遊びになってこそ、我ものになる。ものにすることが大事だと思います。

赤西：異年齢保育で、いつも考えて、考えて、結局たどり着いたのは、異年齢保育は無理ということ。それにはいろいろな意味があります。今、秋田先生がおっしゃってくださった、園全体で見る。だから異年齢保育という言葉自体が狭いと思っています。ただ、発達を保障するための集団保育は必要です。これももちろん賛成です。異年齢保育が出てきたときに、思いやりとか優しさとかという言葉がずっと出てくる。これが曲者です。

異年齢と遊んでいる時に、今日、動画を見せていただいて、4歳の黄色い帽子の女の子は何も優しくない。何も思いやりを表していない。でもとても意味があるというのは見ていてわかりました。だから、恐らく私の知っている子ども同士の関わりで、3歳と5歳は一緒に遊ばなくて、でも一緒に遊ぶ時はどうしているのかというと、5歳が3歳をパシリに使っている。どんどん使います。汗をかいて必死になってついていく。でも最後の最後は「お前も来い」と呼んでもらえる。そして嬉しそうにまたパシリをさせられる。親が見たら辛くて悲しいかもしれない。でも、異年齢交流の本質というのはこの辺りではないかと思います。

なので、ここは私たち現場の人間もやさしさ思いやりを育てるためにという目的意識から少し外れて、もう少し子どものことを見直さなければならないのではないかと思っています。

一般 E: 非認知スキルを使うのも違いを感じないと、自分と違うということを感じないと恐らくそれは培われないのだらうと思います。だからこの時期に自分との違いを感じられる体験、その違いに対応するような体験というのは必要ではないでしょうか。先生がおっしゃるように、思いやり優しさでくっつてしまうとそのようなお話になってしまいます。今日、先生にお話いただいた非認知スキルですが、その辺りを生きていくために本当の力になる素地というのは、異年齢保育という表現をすればそうなりますが、やはり多様な関わりというのはとても大事だろうと思います。それがあまりにも年齢別に、何かしらお金がつくとそうしないと、仕組みとしては作れない部分があって、どうしても年齢別クラスが中心ですだけど、田舎でクラスが編成できないところはという表現になってしまうことがもう一方では残念な気がしているということです。

秋田: 補足をさせていただきます。異質な人といえるのはいいというのは、頭ではわかる一方で、疲れるのです。それは幼保小連携でも同様です。異質な人といると疲れるし、だから子どもの居心地も多分、私は幼保連携をして思いやりや憧れが育つというきれいごとの語りは辞めようと言っています。やはり子どもの声を聞くと、一緒にやると疲れる、好きなことが遊べない、年齢で我慢をしなければならない。

ただ、私はその経験が今の子どもには大事だと思っているのです。でもそれをずっとそれをやっているのではなくて、時にやるので意味がある、その度合いではないかと思います。

一色: ありがとうございます。どなたかいらっしゃいますか。

一般 F: 本日はありがとうございました。先ほどから小学校との接続の話が出ていましたが、やはり保育所、幼稚園は経験をベースにしたり、遊びを中心にしたりということでの組み立てになっているかと思いますが、小学校にいくと教科主義的になり、その段差があって、少しそれについていけない子どもたちがいるのも事実であると思います。その段差を少しでもなくするような取り組みということで、アプローチプログラムを作っていこうという動きがあるのですが、一体、この幼稚園、保育所で、アプローチという意味でどんなところが期待されているのか、何をやっていけばいいのか、それについてのお考えしたいのです。

秋田: 今子どもは、低年齢から保育所や園でも、昔の1年保育、2年保育ではなくなってきています。その時にやはりより質の高い遊びや協働を生み出していくという緊張感であったり、そこで何が大事であるかを考えていくことが、アプローチカリキュラムで大事だと思っています。

決して、小学校の前準備というよりも、やはり長くやってきた時に、5歳の伸びが薄い園もあるわけです。何となく、その場で暮らしていけるけれども、もっと遊びを挑戦的に、子どもは伸びるはずなのに十分に大人が伸ばすのではないのですが、発揮できていないことはないだろうか。そこをやはり協働の力を高めていくようなアプローチということが私は重要であると思っています。小学校に行って困

らないための準備という面がないわけではないことは、行政に関わっているのと言わないといけないのですが、でも本当に大事なことはやはり慣れ親しんできた場所で、特に限られたスペースの中で5歳の居場所というか、5歳後半がより伸びたいと思う力を保障できるようなカリキュラムを考えていくことが大事だと思っています。

それから幼保連携での幼小接続を推進してきています。それは、小学校の先生が、やはり乳幼児期からの育ちを知ることが小学校の授業を変えるからです。私は小学校の校内研修に数多く入っていますが、その先生の小学校の先生が低学年から6年までの全員に、1日だけ、乳児保育に入ってもらっています。一緒に保育をみることもしてみましたら、時間的に授業を自習にしますから難しいです。長続きしません。ですから、1日保育士体験をやってもらうと何が変わるのか。そうすると、まず、子どもとの接し方、保育士がどのようにして子どもと環境を作っているのかというところから、自分の小学校での関わりを振り返るということが出来る。

それから、何度も1日保育士体験をした小学校の先生が私に言われたのは、目の前の子どもの背後にある生育歴が見えるようになった。このようにして育ってきたのだということが、やはり4月1日から担任をして3月31日までに育て上げていくところの学年での変化は見えていても、なかなかその後ろにあったものが見えなかったのが、乳児を見ていると、この子ども1人ひとりがどれだけの人の手によって育ってきたのかが見えると、やはり目の前の学年の子どもの見方が変わる。

私が学んだのは、幼保小接続・連携をすることによって、どちらが上とか下とかという発想ではなくて、より小さい者、弱い者から我々がどれだけ深く学べるかということこそが、実は真の学びとしては、とても大事であるということを小学校の先生が本当に学んでくださる。ただ、そこに行き着くまでには7年間ほど、私も校長、園長ともぶつかりあい、葛藤がある中で得ていくものが大きいと思います。だから、あまりきれいにアプローチカリキュラムやプログラムができたとか、スタートカリキュラムができたとかという最後の形だけが大事なことでないと思います。

赤西：おっしゃる通りです。小学校の先生は板書で授業をされることがあって、話し言葉の能力がとても高いのです。ところが、乳幼児の子どもたちは、成長の発達のバランスがまちまちで、認知の特性が顕著に現れますので、話し言葉だけでは理解がしにくい。進めにくいのです。ですから、今、秋田先生がおっしゃったように、小学校の段差をなくするためには、小学校の先生たちが乳幼児をもっと知る機会が多くなければいけないと思います。これを是非進めていただきたいです。

一色：時間となって参りました。私自身も小学校との連携、これが非常に重要であると思っています。小学校というのは、既に具体的カリキュラム、教育の質を持っています。それをもっと小さい子どもからのステップ・バイ・ステップでやっていくとなると、小学校のカリキュラムもすべて変えなければいけない。そのベースには小学校の先生方が先ほど、秋田先生がおっしゃったように、小さい子どもたちの幼稚園、保育園を学ばないといけない。そうしてステップ・バイ・

ステップで子どもたちを大きくしていくということではいけない。但し、皆さん方がそういう気持ちになって、保育所、幼稚園、小学校がそのようになれば、そういう動きができるのではないかと期待しています。

今日はどうもありがとうございました。